南山大学人類学博物館
2026 年度博物館講座

レクチャー＆パフォーマンス

「立ち向かう音楽ー立ち直る音楽」

第１回　6/6（土）

松平勇二 氏（ノートルダム清心女子大学 准教授）
「困ったときこそ歌って踊る――
ショナ社会の宗教儀礼と音楽」

第２回　6/13（土）

平田晶子 氏（愛知大学 准教授）
「関係を編み直す歌――ラオスのラム歌謡と
回復のミュージッキング」

第３回　6/20（土）

川瀬慈 氏（国立民族学博物館 教授）
「エチオピア、吟遊詩人が照らす社会と生死」

第４回　6/27（土）

相田豊 氏（上智大学 特任助教）& PONISHI
「笛でやつらを吹き飛ばせ――
反骨のボリビア・フォルクローレ音楽家たち」

お問合せ：南山大学人類学博物館
〒466-8673 名古屋市昭和区山里町 18
火曜～土曜　10：00 ～ 16：30
Phone：052-832-3147
E-mail：a-museum@nanzan-u.ac.jp

【会場】

南山大学 R 棟 R49 教室および
人類学博物館（R 棟地下１階）

【時間】

13:30 ～ 15:30（休憩あり）

【受講料・全４回】

一般 4000 円 / 学生 2000 円

参加申込は QR コードから

申込期間 4/1（水）**～ 5/18**（月）

（定員に達し次第受付終了）

自然災害や社会的分断、日常生活に至るまで一人びとはさまざまな困難のなかで、音楽とともにどのように抗い、癒やされ、回復してきたのでしょうか。本講座では、ジンバブエ、ラオス、エチオピア、ボリビアなど世界各地で調査・研究と音楽実践を重ねてきた４名の講師によるレクチャーとパフォーマンスを通して、音楽がもつ社会的・文化的な力を体感的に学びます。

写真上から
ラオス調査村、ヤオ治療の場面（2010 年 平田晶子撮影）
ジンバブエの宗教儀礼にて（2026 年 松平勇二撮影）
フォルクローレ音楽演奏グループ（2019 年 相田豊撮影）
酒場でのアズマリとのやりとり（2022 年 川瀬慈撮影）

南山大学人類学博物館　2026 年度博物館講座　レクチャー＆パフォーマンス

「立ち向かう音楽―立ち直る音楽」

第 1 回　6/6（土）

松平 勇二 氏（ノートルダム清心女子大学 准教授）

「困ったときこそ歌って踊る――ショナ社会の宗教儀礼と音楽」

ジンバブエ共和国では、音楽が政治的にも宗教的にも非常に重要な役割を果たしている。そこに暮らすショナ人の間には、困り事があると霊媒師を訪ね、歌い、踊り、語り合いながら問題を解決していく文化がある。講演では、ショナ社会の概要を紹介したうえで、宗教儀礼で用いられる音楽を実演し、その臨場感を体験してみる。また、代表曲「ネマムサーサ」から読み取れるショナの人々の口頭伝承や生き方についても深く掘り下げる。

さらに、名古屋で活動するジンバブエ音楽グループもゲストとして参加予定である。

若手の音楽グループ Madirirano Mbira Group のビデオ撮影を終えて（2026 年 松平勇二撮影）

第 2 回　6/13（土）

平田 晶子 氏（愛知大学 准教授）

「関係を編み直す歌――ラオスのラム歌謡と回復のミュージッキング」

ラオスには、ケーン（ラオスの笙）の伴奏に合わせて人びとが歌い、踊り、音楽を囲んで集まる「ラム歌謡」という歌唱文化がある。ラム歌謡は、娯楽として親しまれる一方で、人びとが困難に直面したときに心身の回復や人間関係の立て直しを支える役割も果たしてきた。本講演では、山地の村で行われる歌とケーンの演奏を手がかりに、音楽がどのように人びとを集め、家族や祖先とのつながりを呼び戻し、回復へと導くのかを紹介する。音楽そのものが「治す」のではなく、歌を通して人びとの関係が編み直されることで立ち直りが生まれる――その過程を具体的な事例から考える。

ラオス調査村にて（2009 年 カウンターパート撮影）

第 3 回　6/20（土）

川瀬 慈 氏（国立民族学博物館 教授）

「エチオピア、吟遊詩人が照らす社会と生死」

本講義では、鋭利な社会風刺や即興的なパフォーマンスを通じ、自明視された日常を鮮やかに「異化」するエチオピアの吟遊詩人集団、アズマリやラリベラを紹介する。講師が長年のフィールドワークに基づき制作した民族誌映画の上映を交え、彼らの生活世界を多感的に描き出す。社会を映し、批判し、生死の深淵を照らし出し、神の祝福を反映する「声」。音楽が娯楽を超え、現実の認識を組み替え、苦難に抗うための「術（アート）」となる過程を考察する。

登壇者近影、アジスアベバにて（2023 年 Endalk Fanuel 撮影）

第 4 回　6/27（土）

相田 豊 氏（上智大学 特任助教）

「笛でやつらを吹き飛ばせ――反骨のボリビア・フォルクローレ音楽家たち」

南米ボリビアで 1970 年代に「新しい音楽」として興隆したフォルクローレ。ケーナやサンポーニャなどの笛や、チャランゴといった民俗楽器の音楽は、日本の私たちにはどこか郷愁を誘うものであるが、その裏には明かされざる「もうひとつのドラマ」が存在している。個人の物語を愛し、他者の音を聴かず、堂々と嘘を楽しむ…。そんなボリビアの音楽家たちが時代に抗ってまで勝ち取ろうとしたものは何だったのか。彼らの戦いはその後どうなったのか。本講座では、ボリビア音楽演奏グループ「ポニシ」の演奏とともに、ボリビア音楽家たちの生について考える。

登壇者、ステージにて（2019 年 Sonia Pérez Mamani 撮影）

PONISHI（ポニシ）　6/27（土）共演者：朝倉 隆文 氏・西川 哲 氏・羽深 愛 氏

ボリビア音楽をこよなく愛するメンバーで 2023 年に結成されたアマチュアバンド。高山都市ラパスの音楽を中心に、ボリビアの音楽を演奏している。メンバーは出身地も、仕事も、年齢も、今住んでいるところも様々。